

戦後五十周年に寄せて

大牟田市 伊藤 ミドリ（旧姓：柿添）

今年は、戦後50周年だ……と世間は騒がしいが、私の50周年は、4年前に過ぎてしまった。父・末雄の50回忌と共に。

父が亡くなったのは長崎県の五島の沖だった、と母は話してくれた。真っ暗な夜の海で800余名の方々と運命を共にしたというのだ。

船の名は「大洋丸」。昭和17年5月8日の夜、16年12月の日米開戦からまだ5ヶ月しか経っていない近海での出来事である。広島県の港を出航して3日目の夜のことだったのである。シンガポールのゴム園で技師をしていた父は、家族が日本へ引揚げた後も、単身赴任で残っていた。しかし日米開戦で日本へ帰った後、命令を受けて、他の南方経済開発派遣要員の方々と共に、再度渡航する途中だったのである。

その夜、当時5才になったばかりの私は、家中が慌ただしくざわめく気配で目覚めた。誰も何も話してくれない異様な雰囲気は、灯火管制下のうす暗い部屋と、母親のただならぬ動きと共に、今もはっきりと思い出せるほど強いものであった。

母は五島へ行き、父の遺骨と、遺品を入れた箱を持ち帰った。しっかりと身につけていたという愛用のカメラ、そして名札入れやサイフなど懐かしい品々を、私達はそっと開いて天日に干した。

しかし、その中で一番印象に残っているのは、遺体が履いていた革靴である。小さなフジツボが、ざらざらと表面にはりついていたのは不気味であった。海岸に横たわる動かぬ父の靴に、一見、動かないモノに見える貝ガラが、生命の営みを始めていたのが子供ながらも理解できて、複雑な気持ちで眺めたことを今も思い出す。物資の不足していた頃のことで、その靴が浴室の窓外に干していた時に何者かに盗まれてしまったことも、私の印象を強いものになっているのかもしれない。

「大洋丸」は、多数の死者を出したにもかかわらず、合同慰霊祭も何もなかった。極秘扱いだったというが、開戦5ヶ月後に敵方が日本海を往来し、当方にこのような被害が出たことはとても公表できなかったのだろう。新聞には「敵潜水艦を勿ち撃沈」という見出しで来襲は認めているものの、「〇〇丸沈没」と船名も伏せられ、一般的な読み方だと見過ごしてしまうような扱いであった。

それでも、父の葬儀は立派なものだった。姉が通っていた近くの女学校から、先生に引率されて訪れた女学生の列が庭に並び、晴着を着せられた私は、沢山のお姉さん達に見つめられ、うれしくて大はしゃぎであった。

しかし、大人達の涙をそそっているとも知らず無邪気にはしゃいでいた幼児も、次第に現実の波に押し流されていったのである。戦争の激化と共に、兄や姉は学徒動員で、母は職を得て、

各々が工場へと出かけて行き、食糧の買出しに出かけた祖母の帰りをひたすら待ちわびるカギっ子になっていたのである。小学校も、入学したかと思ったら空襲で全焼。私も祖母と共に、炎を上げる隣家の横を走り抜けて避難したこともあった。幸いなことに、兄の消火のおかげで延焼をくい止めることができ、父の建てた家で一家身を寄せ合って暮らしていくことができたのである。

今から十数年前のこと。死んだ父の年令近くになった私は、病を得て入院したことがあった。ふだんであれば、家庭の主婦の最も忙しい時間帯である夕方のTVニュースも、ゆっくりと見ることのできるありがたい入院生活である。そのニュースで、何と「大洋丸……」と言っているのではないか。一瞬聞き違いかと思ったほど風化しかけた名前だった。

その短いローカルニュースで、私は「大洋丸会」という会があり、長崎市の本蓮寺というお寺で法要を行ったということを知ったのである。月刊「ジャパンプスト」の真相シリーズ「海の藻屑と消えた大洋丸」に、生存者の立場で対談に応じられた方が、会を設立されていたのである。本蓮寺は、遭難騒ぎの時からお世話いただいたお寺で、境内には慰霊碑も建立させていたでいた。

私は、他に推められた大学があったのに、長崎の大学を選んで進学した。しかし、長崎在住中は、本蓮寺も大洋丸のことも知らなかった。だが今は、同期会等で長崎を訪れる時、寺を訪ね慰霊碑に向い、懐かしい気持ちで父と対話してくる。父は、これを望んで私に長崎を選ばせ、私を入院させたのではないかとさえ思うくらいである。

父親不在の家庭の戦後がどんな暮らしだったか、それは日本中あちこちに見聞された例と大同小異で、私だけのものではない。

「戦争体験募集」には、私の体験というより、一般には公表されなかった大洋丸の犠牲者800余名のことを、その中の一人である私の父の記憶を通して記しておきたいと思って応募したのである。

50年経った今、私の息子はカンボジアで働いています。あなた方の中断された意志と情熱を継いで、若者達は今も海を渡っていきます。どうか安心して安らかにお眠り下さい。